

しでも風穴を開けたいとの思いから、私はショアの翻訳作業に精力を注ぎました。本書の出版がその契機となればとの願いを抱きつつ筆を擱くことにします。

2025 年 9 月

小林 隆児

文 献

- 小林隆児（1993）. 自閉症にみられる相貌的知覚とその発達精神病理. 精神科治療学, 8(3), 305-313.
- Kobayashi, R. (1996). Physiognomic perception in autism. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 26(6), 661-667.
- 小林隆児（2020）. 自閉症の子どもとの出会いから五十年——私の臨床, 研究, 教育の歩み. 西南学院大学人間科学論集, 15(2): 255-291.

アラン・ショア著作用語集

アラン・ショアの全著作を読むにあたってぜひとも理解しておく必要がある用語について、彼自身の記述の引用を交えながら解説する。ショアの理論の基盤にあるのは、「人間の初期発達（主に生後1年半まで）の体験を通して獲得された（あるいは、されなかった）脳の構造と機能は、生涯発達を通して、その雛形として働き続けること」、「この時期の体験でとりわけ重要であるのは、主たる養育者との情動的な繋がりであること」、そして「感情が一義的なもので、人間の体験の底（心の生理的最深部）を形作っていること」である。この生後1年半までの初期発達は、脳の中でも右脳成熟の臨界期にあたり、そこで無意識の心的過程が形成される。この時期はアタッチメント形成過程にあたることから、彼は現代アタッチメント理論を調整理論として捉え、神経生物学と精神分析の統合を試みている。よって、ここでは初期発達における右脳の機能が深く関係する用語を中心にとりあげている。ここで注意を要するのは、これまで臨床心理学などで用いられてきた学術用語の大半は一者心理学で概念化されてきたものだということである。ショアは「関係」と「情動」の視点から従来の概念の脱構築を図っている。コミュニケーションという用語が頻出しているのはそのためである。

引用箇所の出典の書名と頁数については、訳書がある場合は訳書の頁を、訳書がない場合は原著の頁を記している。なお、ショアの理論では脳科学用語の理解が不可欠であるが、それについては拙著『アラン・ショア入門』（岩崎学術出版社、2024）の巻末の付録1「脳解剖学の基本用語」（pp.153-156）と付録2「右半球の構造的特徴——特に眼窩前頭前野を中心に」（pp.157-160）で詳述しているので参照してほしい。

あ

アタッチメント attachment

→ 現代アタッチメント理論

暗黙的 implicit

implicit は非意識的心的過程を意味する際に用いられ、時に黙示的、潜在的（たとえば、潜在記憶 implicit memory など）とも訳される。欧米から輸入されてきた学問の世界では、専門領域の違いによって、学術用語の邦訳が異なることは少なくない。意識的心的過程を意味する explicit では、明示的、顕在的（たとえば、顕在記憶 explicit memory など）などと訳される。アラ